

「現場に学ぶ医療福祉倫理」

「人が生き生きと生きるには」

～1人暮らしの認知症の人ががんになったとき～

2008.12.10 東京・健和会・看護介護政策研究所 宮崎和加子

◆これからの大きな課題 自分・友人他・仕事・社会

①がん

②重度寝たきり

③認知症

どうやったら、笑顔で生きられるだろうか？

◆がん末期の人の生き方・その支援から

- ・ がん末期の人の生き方・死に方の事例から
- ・ がんの方々は死ぬまで自分らしく生きられるようになっているか
 - 「がん患者」という見方をしていないか
 - 痛みを完璧にとる努力をしているか
 - 「自己決定権」を重視し、本人の本音の希望に副えているか
 - 「自己実現」できるような最大限の努力ができていますか
 - 本人が「自分の力で生きる」という姿勢になるよう支援できているか

◆認知症の人へのかかわりから

- ・ 「認知症の人」の歴史から学ぶこと
- ・ 自分自身が「認知症になったらおしまい」と思っていないか
- ・ 「認知症の人」と決め付けていないか
- ・ 今の時代に、私たちがやらねければならないこと
 - 認知症の人へのかかわりは、大きく変わろうとしている
 - 認知症になっても元気に生き生きと生きていける時代になってきた
 - 新しい動き・試みを察知

◆「水俣」から学ぶこと

- ・ 水俣で何が起きたか
- ・ 水俣病の患者は、地域でどう見られたか
- ・ 医師や看護師はどうしたか
 - 人として生きること
 - 地域で生活し生きること
 - 環境問題と「人権」

◆「生き生きと生きる」とは

生かされて「生きる」のではなく
自ら、主体的に、目を輝かせて
自分が、看護師として、人間としてできること・できないこと

資料 1

『訪問看護』の試み、そして全国への普及

1. **福祉サービスが圧倒的に不足……** 1977年（昭和52年）から
ヘルパー派遣サービス・入浴サービス・日常生活用具支給サービス
ショートステイ・ミドルステイ等々
→福祉サービス充実のための取り組み 家事援助者・入浴サービスなど
＜『地域看護の展望』劉草書房＞
2. **在宅ターミナルケアの重要性** 1982年（昭和57年）頃から
本人が嫌がっているのに入院させてあっという間に“死”
延命治療をしないで家での“死”
在宅での死に積極的な意味がある
本人が望むところで死にプロとして最大限の支援を
＜『家で死ぬ～柳原病院での訪問看護10年の取り組み』劉草書房＞
3. **補助器具を利用して寝たきりからの解放** 1988年（昭和63年）頃から
デンマークから学んだ 手と心だけではだめ
より自立し、より介護が楽に、より快適な生活の保障を
実践したら想像以上の大きな成果
＜『在宅補助器具活用マニュアル』医学書院 JUN 7月号＞
4. **訪問看護ステーションとして独立** 1992年（平成4年）から
東京都第一号の「北千住訪問看護ステーション」開設
訪問看護が1事業所として独立
所長は、院長・事務長・総婦長・スタッフの役割を
利用者への看護だけでなく、広い意味でのマネージメントを
現在、15ヶ所の訪問看護ステーションの運営
＜『訪問看護ステーション』医学書院＞
5. **巡回型24時間在宅ケアの開始** 1994年（平成6年）から
一人暮らしで全介助でも、人生の終末期でも、本人が望むなら最後まで家に
家族を介護から少しでも解放しよう 家族は家族それぞれの生き方の尊重を
巡回型、24時間、看護と介護がいっしょになって
定期的なケアと臨時・緊急の対応を
＜『最期まで家にいられる在宅ケア』中央法規出版＞

(東京・墨田区 **グループホーム 福さん家**) 2001 より

- ・在宅ケアでの大きな壁 “痴呆老人”
- ・痴呆老人が、生き生きと、伸び伸びと生きられる社会は？
- ・地域の中で、ケアのプロのサポートで、小集団で、共同生活
- ・食事のメニュー選択から、買い物・炊事・後片付けまで自分たちで
 - ・日常生活全般を自分たちで
- ・生かされて生きるのではなく、自ら“生活”し、“生きる”
- ・職員は、“介護”“ケア”をするのではなく、“生活・生き方支援”を

＜グループホームでの実践をしてわかったこと＞

- ・痴呆性高齢者がケア次第で自由に伸び伸びと笑顔で生きつづけられるようにすることが可能なこと
 - 徘徊・夜間せん妄・弄便・・・などの痴呆の周辺症状はケア次第でかなり改善されるし、仮にそれがあっても生活するには、何も問題はない。
- ・痴呆性高齢者という人がどういう人か
 - 普通の人・純粋に一生懸命生きている人・少しできないことがある人
 - できることの方が多い人
- ・「穏やかに 静かに 生きる」は一つの目標
 - しかし、本当はもっと根源的なことに根ざして・目指して
- ・在宅での「個別ケア」(家族介護中心の)ではなく、施設での「集団ケア」(大きい集団の)ではなく
 - 小集団の・「グループリビングサポート」
 - 「グループダイナミクス」を利用して

ただ、単に建物を作るだけではうまくいかない。 内容が重要！

———著書『生き返る痴呆老人』筑摩書房 2003.4 発行 ———

———共著『大逆転の痴呆ケア』中央法規出版 2003.8 発行 ———

認知症の人の“生きる姿”の変遷

- 家で「座敷牢」に閉じ込められた姿・病院の「不潔部屋」で隔離
「離れ」「鍵をかけられ」「外部の人に見られないように」 「家の恥」

- 「19時間磔（はりつけ）」で縛られ
全身縛られ、ベッドにくくりつけ 車椅子に座らせきり

- 「薬」でぐったり
ぼうっと

- 「ネコまま」 混ぜた“食事”を口に入れられ
酢の物も吸い物も薬もまぜこぜにした食事

- 「廊下」を歩き続ける姿

- テレビの前でぼうっと“宙”を見ている姿

- みんなで折り紙をしている（させられている）姿

■認知症の人の社会の中での生き方・支援のあり方の模索・確立

「ボケなんか怖くない」

ボケても普通に地域社会で生き生きと生きていけるように

■「がん」とともに豊かに生きる

高い確率で「がん」になる

“「がん」になってよかった”と思えるような生き方・支援を

■看護・介護の関係を深める ケア・支援全体を深める

地域社会の中で、また病院や施設も含めてケア全体の質を高める

特に、“看護”と“介護”の関係と今後のあり方を、歴史的に、また世界的な視点で深めていくこと

■家で暮らしたい人が、ずっと家にいられるように

要介護状態になっても、家族がいなくても、家族が介護しなくても、がんになっても 家にいたい人が家で暮らせ、死んでいけるような地域社会・社会の仕組み作りを！

■みんなが、自ら考えて、主体的に生きること ～生き生きと生きる～

もっと、いい意味での“わがまま”になろう！

周囲は、その“わがまま”を実現しよう！

社会全体が、自覚ある良識ある主体的な人間に

そして、そのことが当たり前の社会の認識・仕組み作りを

参考までに

- 主な著書
- ・『地域看護の展望』 1980 剋草書房 共著
 - ・『家で死ぬ』 1988 剋草書房 共著
 - ・『看護婦は自転車に乗って』 1993 筑摩書房
 - ・『訪問看護ステーション』 1993 医学書院
 - ・『訪問看護を始めるナースへ』 1996 医学書院
 - ・『最後まで家にいられる在宅ケア』1996 中央法規出版 編著
 - ・『訪問看護現場からのQ&A』 1998 医学書院
 - ・『家で死ぬのはわがままですか』 1998 主婦の友社 単著
 - ・『家で死ぬのはわがままですか』 2002 ちくま文庫 単著
 - ・『在宅ケアにおけるリスクマネジメントマニュアル』2002.3
日本看護協会出版会 単著
 - ・『戦後日本病人史』(「寝たきり老人、痴呆老人の戦後史」)
農文協(川上武編著) 共著
 - ・『生き返る痴呆老人』 2003 筑摩書房 共著
 - ・『大逆の痴呆ケア』 2003 中央法規出版 サポーター
 - ・『在宅での看取りのケア』 2004 日本看護協会出版会
 - ・『愛しき水俣に生きる』 2006 春秋社
 - ・『あなたも地域看護のフロントランナー』 2008 日本看護協会出版会 共著

私が紹介された本

- 『看護婦 宮崎和加子』こんな生き方したいシリーズ 1998 理論社 加藤千代著